

特集

古生物学のアウトリーチ —博物館での取り組みを例にして—
Outreach of paleontology in museum activities

アウトリーチ(outreach)とは、本来、「手を伸ばすこと、手を伸ばした距離・到達距離」を意味する言葉であるが、科学分野からの観点では、「研究を行う組織・機関が一般社会に向けて教育普及、啓発活動の働きかけを行うこと」を意味している。

近年、中学・高校生の「理科離れ」に代表されるような状況に対する危機感を反映し、科学界全体にアウトリーチの必要性が顧みられている。これまで「科学」というと、一般の人たちにとっては堅苦しさや敷居が高いといった意識があったことは否めない。そのため、最近、そのようなイメージを払拭するため、サイエンスカフェやサイエンスエドゥケーターの養成といった、科学をより身近に感じ、科学に対する理解を深めてもらうような取り組みも行われはじめている。

一方、国や地方自治体の財政難が叫ばれる昨今、大学、博物館等の公の施設においても大幅な予算の削減を余儀なくされ、これまでのような運営や研究スタイルの維持が難しい状況になってきている。国立大学や研究所はすでに国立大学法人および独立行政法人化となり、また、多くの公立博物館には指定管理者制度が導入され、これらの機関はまさに競争原理の波にさらされていると言っても過言ではない。そして、これらの機関の研究者には、研究費の使い道に対する説明責任が求められ、ますます目に見える形での研究成果の社会還元が要求されている。

このような厳しい状況は、古生物学にとっても決して他人事ではない。特に古生物学をはじめとする基礎科学は、他の応用科学に比べ社会還元としての研究成果が直接見えにくい面があり、そのためにもアウトリーチの必要性が強く顧みられている。古生物学の基本的役割は、化石の調査・研究を行い、研究結果を論文にし、その成果を社会に還元していくことである。この「社会に還元する」ことの中に教育・普及というアウトリーチが含まれる。幸い、子どもを始めとして大人たちの間でも恐竜、アンモナイト、三葉虫などの人気が高いことにみられるように、古生物学は学問分野として一般の人たちの関心が低い存在ではない。一般の人たちも化石をとおして、太古の生物にロマンを感じているにちがいない。つまり、古生物学は、化石という実物をとおして自分たちの住む地球や生命の生い立ちについて分かりやすく、面白さをダイレクトに伝えることができる学問であり、それが古生物学にとっての大きな強みである。さらに近年では、地球環境問題が国民的関心事の一つとなっているが、この問題を解明するためにも古生物学的視点から果たす役割は非常に大きいと考

えられる。

これまで、博物館は古生物学のアウトリーチの先導役を果たしてきたのではないと思われる。博物館は生涯学習の場であって、年齢性別を問わず誰でも気軽に訪れて古生物学に触れることができる場所である。多くの人が一度は博物館を訪れたことがあり、恐竜をはじめ多くの化石に胸をときめかしたことがあるに違いない。多くの人たちにとって、博物館が古生物学に触れる最初のきっかけであり、窓口の役割を果たしている。

そこで、2007年2月2日(金)に日本古生物学会第156回例会(徳島県立博物館)において、両角芳郎・辻野泰之・大野照文の3人が世話人となり、「古生物学のアウトリーチ —博物館での取り組みを例にして—」というテーマでシンポジウムを開催した。このシンポジウムではアウトリーチの最前線にあると言われている博物館の活動を例にしなが、博物館での活動にとどまらず、大学や研究所での活動も含めて、今後、古生物学会として古生物学のアウトリーチにどのように取り組んでいったらよいか議論を行った。

シンポジウムにおいては、以下の6つの講演が行われた。1) 両角芳郎: 博物館の教育普及活動と古生物学のアウトリーチ、2) 田口公則: 博物館と学校の連携 —化石ローンキットプログラムの展開—、3) 藪本美孝: 博物館ネットワークと古生物学のアウトリーチ —巡回展の試み—、4) 大野照文: 生涯教育における地域連携の要としての大学博物館 —京大総合博物館を例にして—、5) 矢島道子: 私と博物館 —博物館を利用する立場から—、6) 北里 洋・05・06年度将来計画委員会: 古生物学の発展と博物館の役割。

本特集はこのシンポジウムの記録である。両角・田口・藪本・矢島・北里の各氏の講演については要旨を掲載し、講演後に行われた総合討論の概要も加えた。本特集号には、アウトリーチ関連の2編の論説も掲載されている。大野照文氏の論説は、シンポジウムの講演内容を基に京都大学の取り組みを解説したものである。また、大木公彦氏の論説では、古生物学のアウトリーチとフィールドミュージアムの構築に関して、鹿児島大学総合博物館の活動の例を紹介している。今回のシンポジウムおよび本特集を契機として、日本古生物学会および博物館における古生物のアウトリーチ活動がさらに発展することを期待したい。

世話人: 両角芳郎(元 徳島県立博物館)・辻野泰之(徳島県立博物館)・大野照文(京都大学総合博物館)